

エコファームグループ

里山の今

景観グループ

◆自然の怖さ

松本 武彦

新型コロナウイルスの拡散がやまず、外出や活動の自粛が求められる中、過日の新聞に、この影響を諸に受ける栃木県のイチゴ農家のことが取り上げられていた。

それによると、このイチゴ農家は、昨秋、関東地方を襲った台風19号でイチゴハウスが吹き飛ばされるなど甚大な被害を受け、被害額も多額となった。しかし、何とか生産体制を立て直して、春の収穫に希望をつないだという。

だが、安堵もつかの間のこと、すぐに次の困難がやって来た。今冬の日照不足である。本来、光を好むイチゴにとっては日照不足の影響は大きく、収穫量が上がらないままイチゴの旬である春を迎え、イチゴ狩りの客を待つことになった。

ところがまたも苦境が。新型コロナウイルスの拡散である。感染予防として外出の自粛措置が講じられたため、イチゴ農家は相次ぐ予約のキャンセルに直面しているという・・・。

イチゴ一つにも人の苦勞が隠れていることを再認識させられるとともに、限りない恩恵を受ける自然ではあるが、時には災いとなって無差別に襲い来る怖さをも痛感している。

前段が長くなってしまったが、新型コロナウイルス感染予防のため、「ならやま」でも3月の大半が活動自粛となった。エコファームではこれがジャガイモの植え付けや夏野菜の播種時期と重なったため、作業の遅れも懸念されたが、有志の尽力により、これらの作業を終えていただいたのは何よりのことだった。おかげで、ビニールハウスではナスやキュウリ、ナンキン、トウガラシ等々多種の野菜が元気よく芽を伸ばし、皆さまとの出会いを待っている。どうぞお楽しみに。



◆ある日のならやま

西谷 範子

3月、ならやま作業は1か月の休眠に入った。早春の木々や草の成長がこれから目覚ましくなる時である。この活動が生活の中にしっかり組み込まれてしまっている身としては、なんだか間が抜けたようではあるが、家でもやり残してある仕事は多く、退屈することはない。

ところがならやまに行かざるを得なくなった。景観グループの花の部を担当しているが、ならやま作業は週1回しかないので、種まきをして毎日灌水しなければ苗作りはできない。家で種をまき、本葉が出た頃にポットにあげて苗を作る。地植えに適した大きさになった時にならやまに運んで植え付ける。すでに種まきをしてあったナデシコの苗が、3月の陽気で日に日に伸び始めてきた。もう放っておけない丈になったので畑に植えなければならぬのである。

誰もいないならやまは明るくて甘い暖かい空気が広がっていた。紅白の雪柳は満開になり、椿は好きな方を向いて咲いている。何といてもうれしそうに咲き誇っていたのは菜の花であった。なんとならやまに似合うのだろう。その黄色の花は青空に映えてならやまを謳歌していた。

水仙、チューリップ、レンギョウ、スノーフレイク、ハナニラ、白花タンポポ、ムラサキハナナ、花畑は早春のよそおい。オオイヌノフグリ、ヒメオドリコソウ、ハコベたちはもうとっくにならやまの主を気取っている。紅茶とパン、一人のお茶もいいもんだ。

畑の草を引き、ナデシコを植えた。当分来られないけど、自立してしっかり根付くようによく申し渡した。

前に草ひきをした所にツクシがたくさん出ている。今年はいちだんと増えたようだ。今日の晩ご飯はこれのごちそうにしよう。

